



年間第 29 主日 (ルカ 18:1-8)

司式者の唱える祈りに深くあずかれるように

いよいよ、新しいミサ式次第を使い始めるまで残り一ヶ月ちょっととなりました。司祭館に、長崎教区が発行した新しいミサの式次第が届きました。以前使っていた日曜日の「聖書と典礼」の大きさ (B 6 版) でした。こうなると通常の祈祷書のほうを B 6 版に変えてもらいたいくらいです。

皆さんはこの前始まった連続テレビ小説「舞いあがれ」ご覧になっているのでしょうか。高畑淳子さんが五島の素朴なおばあちゃんを熱演していますが、その中で「およ～」と相づちを打つ場面があります。生粋の五島生まれの中田神父の理解では、「およ～」とは「そう。その通り」という相づちだと思っていますが、テレビでは「そう。その通り」に当てはまらない場面でも「およ～」と言っているので首をかしげています。

「おはようございます」「およ～」「こんにちは」「およ～」「こんばんは」「およ～」根っからの五島人でもそこまで「およ～」とは言いません。それと、主人公と仲良くしてくれている小学生も、「およ～」と言っていますが、今の時代に「およ～」と言う子供はどこを探しても居ないと思います。あのドラマは昭和の古き良き時代を反映しているようです。

さてようやく届いた「新しいミサ式次第」の中の「叙唱前句」について少し触れたいと思います。ちょうど本日の聖書と典礼七頁に取り上げられています。具体的には「主は皆さんとともに」「またあなたとともに」「心をこめて」「神を仰ぎ」「賛美と感謝をささげましょう」「それはとうとい大切な務めです」この部分になります。

この叙唱前句の目的は、解説してくださった神父様の説明を引用すると「賛美と感謝の祈りを唱える人と、参加している信者が互いに心を合わせ、信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすることです」となっています。

その中で特に、「信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるようにすることです」この部分に中田神父は深く心を打たれました。信者が司式者の唱える祈りに深くあずかるためには、当然、司式者がそれ相応の唱え方、祈り方をしなければならぬ。私はそう理解しました。

信者が司式者の祈りに深くあずかれるのは、司式者の祈りが信者の心に響くときでしょう。司式者の祈りが信者にとってまさに願って欲しい祈り、神様に届けて欲しい祈りに聞こえたとき、司式者の祈りに深くあずかれるわけです。一つの答えを与えられた思いがしましたし、身の引き締まる思いがしました。

ミサの祈りの言葉ではありませんが、一人の司祭の言葉が深く心に響いた話を紹介したいと思います。初めてお仕えした川添神父様の、滑石教会にいた時代の体験です。ある日神父様が、市内の路線バスに乗ろうとバス停に向かいました。するとそこに、中学校の生徒と思われる学

生がいました。金髪の部分染めを入れて、いかにも「俺に近づくな」みたいな雰囲気漂わせていました。

また同じ曜日の同じ時間に神父様がバス停に行きました。するとあの金髪の少年とまた会いました。そこで川添神父様は親切心でこう言ったそうです。「おい。気付いているか知らんけど、髪にペンキの付いとるぞ。」この少年は何と、次に会ったときは髪を元に戻していたそうです。よほど、神父様の言葉が心に刺さったのでしょう。

もし同じ場面で、「君は格好いいと思っているかも知れないが、君の髪型は格好悪いぞ」とまともに言っていたなら、その少年は態度を変えなかったかも知れません。言葉は時に、人の心に深く染みこんだり、人の心を閉ざしたりするものです。この体験を川添神父様から教えてもらったとき、日常でも心に響く言葉を届けることのできる川添神父様は、すごい人なあと思ったのでした。

ルカ福音書の 22 章、過越の食事の冒頭で、イエスが珍しく個人的な感情を漏らします。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」(22・15) この祭壇で繰り返されていることは、イエスが切に願っていたことです。それが司式者の祈りで信者に伝わるように、これから心がけたいと思います。

少し、今週朗読された福音にも触れておきましょう。一人のやもめが、傲慢極まりない裁判官のもとにやって来て訴えます。「相手を裁いて、わたしを守ってください」(18・3)。この女性の言葉はボディブローのようにじわじわ効いてきます。ボクシングでボディブローは、効き始めると地獄のような苦しみを覚えるそうです。耐えられなくなった不正な裁判官が、本来の務めを果たします。

どんなに傲慢な人でも、不正な人でも、良い部分はあるわけです。やもめの訴えは不正な裁判官からさえも正しい振る舞いを引き出す訴えでした。不正な裁判官から良心のかけらを呼び覚ます、心に響く言葉を持っていたやもめとは、イエスのことだったのかも知れません。

司祭も、毎週の説教で言葉を絞り出しています。赴任した教会によっては教会新聞にも毎月言葉を絞り出します。その務めの中で中田神父も鍛えられ、七年のうちの何回かは、「信者が司式者の唱える祈りに深くあずかる」その助けになったかも知れません。そうした体験が一度もなかったとしたら、この七年間の中田神父の説教や「瀬戸山の風」の原稿は時間の浪費、印刷資源の無駄遣いだったかも知れません。

たとえ力不足の司祭だったとしても、イエスはこのミサの中で司祭一人ひとりを使って、昼も夜も叫び求める人の声に耳を傾け、父なる神に届けてくださるのです。皆さんが祈りの中で願い求めていることは、イエスが目の前の司祭を通して必ず父なる神に届けてくださいます。信頼して、新しいミサ式次第が使われ始める待降節第 1 主日以降も、心を合わせてミサに参加することにしましょう。